

翻訳と日本文学の再誕生

——『蜻蛉日記』の韓国語訳——

イ ミ ス ク
李 美 淑

一. はじめに——異文化圏で読み直される日本古典文学——

『蜻蛉日記』上巻には、道綱母が藤原兼家と三日続けて夜を共にし、正式に結婚が成立した朝、以下のように後朝の歌をやり取りする記事がある。

また、三日ばかりの朝に、

しのめにおきける空は思ほえであやしく露と消えかへりつる

返し、

さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめするわれはなになり

(上巻・94頁)^①

女性の家を朝早く出るしかない男性の切なくつらい心を露のように身が消えてしまうほどの思いであると誇張し詠んでいる兼家の常套歌に、そのようなあなたを空頼めする私とは、色を直し応酬する道綱母の歌における「われはなになり」^②という表現は、『蜻蛉日記』が翻訳の過程を経て平安時代の日本という特定の時空間を生きた一女性の結婚生活の嘆きの文学という枠を超え、世界文学として再誕生する際、注目すべきであると思われる。「われはなになり」という表現において「われ」への探求は人間としての存在性の本質に触れるものではなく、夫との関係から胚胎された自分の位置、自分に対する夫の愛情の程度に対しての問いである。そうはいうものの、この表現には道綱母という千年も前に生きた女性の生々しい自意識が鮮明に表れており、時空間を異にする読

み手に、性別権力関係の内実を物語った普遍的な女性文学、夫という他者との関係における自分の現在位置を絶えず問い続けている一人の女性の普遍的な自己叙事として十分読まれるからである。道綱母が『蜻蛉日記』で書こうとしたものは、上巻の序文と結びに記されているように自らの「人にもあらぬ身の上」、「思ふやうにもあらぬ身」、すなわち兼家との結婚生活の経緯である。兼家との不安定な夫婦関係とまたそこから生じた自分自身の苦悩を「日記」としてしたため、「天下の人の品高きやと問はむためし」にしようとした道綱母の意識もまた、「われはなになり」という自意識と同一線上にあると言える。

書き手の手を離れたテキストが書き手の本来の執筆意図などに縛られず読み手に自由に読まれることと同じく、あるテキストが翻訳という過程を経たとき、翻訳された言語側の読み手によって自分の文化に照らし合わされ新しく解釈されるようになるのは、当然のことである。10世紀後半道綱母という一女性によって世に出された『蜻蛉日記』もまた、当時と現在の日本という時空間を超え異文化圏の読み手に新たなテキストとして位置づけられているのであり、「自分の身の上の嘆きの文学」から「女性の自意識が凝縮された女性文学」に捉え直されていると思われる。

本考察では、『蜻蛉日記』の韓国語訳を中心に、日本の古典文学のテキストがどのように翻訳という過程を経て同じ東アジア漢字文化圏ではありながらも韓国という異文化圏の書物として再誕生され、それによってどのように日本文学が新たに位置づけられているのかについて考えてみたい。翻訳とは、「異なる言語によって書かれたテキスト間の等価 (equivalence) 探し」とも規定できるだけに、その等価探しは異なる言語間の一対一の対応や置換には止まらず文化のレベルにまで及ぶものであると思われる。特に古典文学の翻訳というのは、主語、表現の省略などによる文章の難解さやその時代性に基づいた社会・政治・文化的な要素などが作品の理解に大きく関わっているため、本文だけの逐語訳では十分訳されたとは言い難い。要するに、古典文学の翻訳というのは、翻訳の本文だけではなく解説や注、付録などをも含めてはじめて一つ

の世界として成り立つ書物なのであり、作品全体の基調の把握が翻訳に大いに影響を与えているとも言えよう。

以下、『蜻蛉日記』の韓国語訳にあたって直面した様々な問題や翻訳者自身の作品全体の把握、そして作品の読みが『蜻蛉日記』の韓国語訳にどのように影響を及ぼしているのかについて考察することによって、日本文学の枠を超え新たな「文明のテキスト」として再誕生された『蜻蛉日記』の韓国語訳の意義などについて考えてみる。

二.『蜻蛉日記』の韓国語訳

1961年韓国外国語大学校に戦後初めて日本語科が設立されて以来半世紀が経った現在、ほとんどの韓国の大学に日本関係の専攻が設けられていることもあり、近現代と古典を問わず韓国における日本文学の研究者層は大変厚くなっている。その上、90年代日本文化の全面開放による日本文化全般への幅広い関心なども相まって最近韓国では日本古典文学の翻訳が盛んになされている。例えば、上代の『万葉集』『古事記』から平安朝の『土佐日記』『伊勢物語』『源氏物語』『枕草子』、中世・近世の『徒然草』『平家物語』『十六夜日記』『御伽草子』『奥の細道』『日本永代蔵』などの作品がここ数年翻訳・刊行されている。さらに、いくつかの作品は翻訳者を異にし翻訳されてもいるが、『蜻蛉日記』が正にそのような作品である。

韓国において『蜻蛉日記』の初訳は2009年8月鄭順粉（チョン・スンブン）氏の訳注によってジマンジという出版社から『チョンリョン・イルギ』（蜻蛉日記の韓国語読み）という書名で刊行されており、2011年初めには拙訳注の二度目の韓国語訳がハングル社から『カゲロウ・イルギ——陽炎のような私の人生』という書名で刊行予定されている。二書共に『蜻蛉日記』の注釈の中で一番新しい木村正中・伊牟田経久氏校注・訳の小学館新全集をテキストにしている。このようにそれほど時を置かず二人の平安文学の女性研究者によって『蜻蛉日記』の翻訳が出るようになったのは全く偶然であるが、『枕草子』

の研究者として既にその翻訳を出してから日本の古典文学の翻訳の必要性を感じた鄭順粉氏の『蜻蛉日記』への関心、そして『蜻蛉日記』から日本文学の研究を始めるようになった李美淑の予てからの思い入れとが相まって立て続けに『蜻蛉日記』という同じ作品の韓国語訳が刊行されるようになったのである。拙訳注の『蜻蛉日記』は、ソウル大学校人文学研究院 HK 文明研究事業団の「文明叢書」シリーズに収められることになっている。

とはいうものの、同じ作品の翻訳でありながらも、書名の「蜻蛉」の意味をめぐって鄭順粉訳注では「蜉蝣」と解するのに対し、拙訳注では「陽炎」と解することからも確認できるように、二つの翻訳の内実はいくぶん異なっている。このことは、翻訳者各々の作品に対する読みの違いによってテキストの読みと味わいが異なってくるという実例として今後の日本古典文学の翻訳に刺激になると共に、現在韓国における日本文学の研究レベルを表す指標にもなると思われる。

さて、拙訳注の『蜻蛉日記』の韓国語訳は、原文を重視しつつも歌など日本古典文学本来の味わいが読み手に自然に伝わるような読みやすい翻訳、緻密な注釈を通してその時代性と文化、作品の内実が読み手に難なく理解される翻訳を目指した。そうすることによって、学部生以上の日本文学専攻の学生や研究者、そして女性文学に関心のある他文化圏の文学専攻の大学院生以上の人々に読まれ、韓国における日本古典文学の底辺を広げると共に、女性文学という観点から他文化圏の文学との交渉をも目標にした。

拙訳注の『蜻蛉日記』の韓国語訳は、以下のような方針のもとで訳された。

先ず、翻訳のテキストは、木村正中・伊牟田経久校注・訳『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集 13、小学館、1995 年）にし、柿本奨『蜻蛉日記全注釈 上巻・下巻』（角川書店、1966 年）、上村悦子『蜻蛉日記解釈大成 第 1～9 巻』（明治書院、1983～1995 年）をはじめ、犬養廉校注『蜻蛉日記』（新潮日本古典集成 54、新潮社、1982 年 10 月）、今西祐一郎校注『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』（新日本古典文学大系 24、岩波書店、1989 年 11

月)などの諸注釈を参考にした。

目次は、叢書の前書き・訳注者の前書き・作品解説・凡例・本文(巻末歌集含め)と脚注・参考文献・付録(『蜻蛉日記』及び道綱母関係年表・主要表現索引・登場人物紹介・登場人物関係図・平安京周辺地図)で構成されている。

本文の構成は、テキストの新全集の構成にそのまま倣わず、大きく上巻・中巻・下巻・巻末歌集に分類し、それを年度別に中分類し題目をつけ、必要な場合、さらに内容別に細分類し小題目をつけた。上巻の序文、上・中・下巻の結びは独立的に分類した。作品の内容を理解しやすくするため、年度別に簡単な解説を終わりにつけた。年度別の題目及び小題目はテキストを参照し訳注者がつけた。

注解は、用語の解説、前後文脈の説明、道綱母の心理など作品の内実に関わる内容だけではなく、「文明のテキスト」として10世紀日本文化を理解するのに必要な社会制度及び生活文化と関わる事項も詳細に記述した。訳注者の本文解釈及び作品の読みも反映した。

三. 本文翻訳における諸問題

『蜻蛉日記』の本文の翻訳にあたって、できる限り原文の文体と文の構成をそのまま生かそうとしたものの、主語と表現が省略されたところが多く時制が一致されていない古典テキストであっただけに、主語と述語、その他の表現を補ったり、段と文を若干切るなり繋ぐなりして意味が伝わりやすくしたり、語順と時制を若干変えたりしたところがある。

(一) 主語と述語の補足

『蜻蛉日記』上巻には、道綱を出産した直後町の小路の女の出現に道綱母が悩み始める、次のような天暦九年(955)9月の記事がある。

さて、九月ばかりになりて、[あのひとが] 出でにたるほどに、箱のある

を手まさぐりに開けて見れば、人のもとに遣らむとしける文あり。あさましさに、見てけりとだに知られむと思ひて、書きつく。

うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむなど思ふほどに、むべなう、十月つごもりがたに、三夜しきりて見えぬ時あり。〔あのひとは〕 つれなうて、「しばしころみるほどに」など、気色あり。

(上巻・99～100頁)

この記事の中で、傍線部の「出でにたる」「つれなうて」の主体は兼家であるが、主語は省略されている。『蜻蛉日記』において兼家は「人」に示されている例もあるが、ほとんどの場合、主語は省略された形になっている。このことは『蜻蛉日記』という作品が兼家との結婚生活を記した作品であるため、一々記さなくても意味が通じるからであろうが、韓国語訳においては主語なしでは意味が伝わらず、「グ・サラム (あの人)」という主語を補充した。また「グ・サラム」は、作品内で兼家を指すときだけに用いた。

また、韓国語訳にあたって、何より訳し難かったところは、以下の引用からも確認できるように、地の文と和歌が繋がる段落における述語の省略であった。

「いかに。返りごとはすべくやある」など、さだむるほどに、古代なる人ありて、「なほ」とかしこまりて書かすれば、〔このように歌を送った。〕

語らはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声なふるしそ
これをはじめにて、またまたもおこすれど、返りごともせざりければ、また、〔次のような歌を送ってきた。〕

おぼつかな音なき滝の水なれやゆくへも知らぬ瀬をぞたづぬる
これを、「いまこれより」と言ひたれば、痴れたるやうなりや、かくぞある。

(上巻・90～91頁)

『蜻蛉日記』本来の文体を重んずる原文重視の立場から、「書かすれば」、「ま

た、」に述語を補わず引き続き和歌の翻訳を試みたのであるが、韓国語としては大変不自然で読み難い文章になるため、最終的にそのような段落には〔 〕のように述語を補足することにした。

(二)「今」を表す時間表現と現在形の時制

『蜻蛉日記』の韓国語訳にあたって次に問題になったのは、回想の文学であることを宣言しているにも関わらず、多く用いられている「今」を表す表現と現在時制の述語をどう翻訳すべきかであった。

『蜻蛉日記』という作品が作中話者道綱母によって自分の「過ぎにし年月ごろのこと」である「人にもあらぬ身の上」を「日記」として書かれたもの、つまり「回想の文学」であるということは、「かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり」(上巻・89頁)という過去形で書き出される序文からも明らかにされていることである。この序文の執筆時点がいつであれ、『蜻蛉日記』は作中話者道綱母によって回想執筆という前提に立ち綴られたものとして宣言されているのであり、「けり」「き」「ぬ」「昔」「いにしへ」などの「昔」を表す表現をもってその意図はある程度成し遂げられていると言えよう。とはいうものの、「回想の文学」であると宣言されているにも関わらず、その時制が必ずしも過去形に統一されてはおらず、「今」を表す時間表現^③と現在形の時制が日記の所々に頻出している。過ぎ去った自分の結婚生活を回想し書こうと宣言した執筆方法とは裏腹に全巻にわたって頻出する「今」の時点に立った表現を用いたその根底には、今現在の「記録」を「日記」のあり方として内面化した書き手の「日記」意識と、その意識の表われでもある「表現」へのこだわりが秘められているように思われる。

そこで、このような「今」を表す時間表現と現在形の時制を『蜻蛉日記』固有の文体、「日記」としての『蜻蛉日記』の性格をもっとも浮き彫りにするものとして捉え、原則として本文の時制を生かした。ただし、原文に即し韓国語

に訳した際大変不自然な文章になってしまうところだけを選別し、若干過去形に時制を変えたりした箇所はある。

たとえば、町の小路の女が兼家の愛情を失ったことを語る次のような引用において、「聞く」「ある」「ありく」という述語は「いま」という「今」を表す時間表現に融合される時制になっており、現在形のまま韓国語訳にしても自然に繋がるため、原文通りそのまま韓国語に訳した。その際、「あきたる」という過去形の表現がかえって「いまぞ」と合わなくなり、全体の時制に合わせ現在形に直した。他に、主語を補ったり接続詞を移動したり句点を省略したりして文の繋がりを整えた。

にはかにかくなりぬれば、いかなるこちかはしけむ。わが思ふにはいますこしうちまさりて嘆くらむと思ふに、いまぞ胸はあきたる。〔しかし、あの人〕は いまぞ例のところにうち払ひてなど聞く。^{上の段に移動}されど、ここには例のほどにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふ〔ことが多かった。そうしている〕ほどに、ここの人、片言などするほどになりてぞある。^{省略}〔が、あの人〕が 出づとては、かならず「いま来むよ」と言ふも、聞きもたりて、まねびありく。

(上巻・114～115頁)

(三) 固有名詞と他の表現の表記

韓国語訳において、人名・地名などの固有名詞の表記は、原則的に日本語の発音をそのまま韓国の外国語表記法に従って表記した。例えば、「初瀬」は「ハツセ」にし、日本語の外国語表記において清音は文頭には来られないため、「兼忠」は「ガネタダ」のように表記した。ただし、官職名や宮中の殿閣名などは、「兵衛佐」は「ピョンウィザ」、「貞観殿」は「ジョンゲンジョン」のように、韓国語の漢字音をそのまま表記した。本文中日本語の漢字表記は原則的に初出の時だけ併記しており、本文と注において人名を表記するとき、「多好茂」は「オ ヨシモチ」のように苗字と名前の間の「の」は省略した。

(四) 歌

『蜻蛉日記』には、卷末歌集を除き、261 首の和歌が収められている。そのうち 122 首が道綱母の歌であるが、道綱母は、それらの歌を詠む際、先行する和歌で形成された歌ことばの「固有のイメージ」を自分の歌に取り入れながら、ときにそれを変容し、自分の身の上や心情を表わす「独自のイメージ」に形成している。『古今和歌集』『後撰和歌集』『古今和歌六帖』などを典拠とするという『蜻蛉日記』の和歌には、先行する和歌の歌ことばが数多く含まれており、また、道綱母が日常生活や物詣での時に接した自然景物を和歌の中に取り入れ、自分の心象を表現している。道綱母は、『蜻蛉日記』に先行する和歌で形成されてきた歌ことばの比喩的イメージを受け継いだのに止まらず、兼家との結婚生活から生じた夫との関係、自分の「身の上」意識をその歌ことばに托して和歌に形象化しようとした。詠み手の本音そのままとは限らないという和歌の限界はあるものの、『蜻蛉日記』における和歌の働きを考えると、和歌に表現された道綱母の自己認識の理解は、作品全体の理解につながるだろうと思われる。

このように『蜻蛉日記』において和歌は作品の根幹にも関わると思われるが、和歌が表音文字の仮名で 31 字の枠内で読まれており、同音異義性を掛詞として取り入れているだけに、その和歌を韓国語に完璧に訳すことは不可能である。そこで、和歌の翻訳は、基本的にその本意を表すのに重点を置いて訳し、縁語や掛詞、そして地の文の引歌などの本歌は脚注において示した。また、和歌本来の音数率を生かすためにハングルでもちょうど 31 字に訳し、5・7・5 の上の句と 7・7 の下の句に分け二行配列した。和歌の一行上には詠者名を表記した。

次の引用は、町の小路の女の出現によって兼家が途絶えがちになり、道綱母が長雨を眺めつつ独り歌を詠んでいる記事である。

六月になりぬ。つuitちかけて長雨いたうす。見出だして、ひとりごとに、
わが宿のなげきの下葉色ふかくうつろひにけりながめふるまに
などいふほどに、七月になりぬ。 (上巻・104 頁)

この引用における「わが宿の～」の歌は、5・7・5と7・7のハングル文字を二行に分け、以下のように訳した。

수심에 잠겨 내리는 비 멍하니 바라보는 새

나뭇가지 아랫잎 어느샌가 시들고

(物思いに沈んで雨が降っているのをぼうっと眺めている間

木の下葉はいつのまにか萎れてしまっていることだ)

この韓国語訳は道綱母が前栽を眺めつついつのまにか変わってしまった兼家との関係を嘆いているという歌の本意を 31 字のハングルに表現するため、「わが宿」は翻訳せず、「下葉色ふかくうつろひにけり」は「下葉が萎れてしまっている」と訳し、歌の本意を表すのに重点を置いた。また脚注では、「下葉は道綱母のたとえである。長い間降る雨を意味する日本語「ナガメ（長雨）」は物思いに沈んで外を見るという「ナガメ（眺め）」と同音異義語である。「꽃잎 색깔은 이리도 허무하게 변해가누나 이 세상 살아가며 탄식하던 동안에（花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに）」(『古今和歌集』・春下・小野小町)を本歌とするこの歌は、夫との関係の中で憂愁に沈んでいる間美貌が褪せ女性としての魅力が衰えるようになったという嘆きが中心的な内容である」と、掛詞の説明と本歌を訳を添えて紹介した。

四. 翻訳者の作品読みと翻訳

ところで、拙訳注の『蜻蛉日記』の韓国語訳には、訳注者なりの作品の読みも反映されている。その一例として、藤原兼家と結婚し十余年が経った康保元年（964年）の夏、道綱母が不安定な自分の身の上を吐露している次の引用における、「さいはひある人のためには、年月見し人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはなくて、思ふことのみしげし」という件の解釈が挙げられる。

かくて、なでふことなければ、人の心もなほたゆみなく見えたり。月夜のころ、よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語らひてもありしころ思ひ出でられて、ものしければ、かくいはる。

曇り夜の月とわが身のゆくすゑのおぼつかなさはいづれまされり
返りごと、たはぶれのやうに、

おしはかる月は西へぞゆくさきはわれのみこそは知るべかりけれ
など、頼もしげに見ゆれど、わが家とおぼしきところは、ことになむあん
めれば、いと思はずにのみぞ、世はありける。さいはひある人のためには、
年月見し人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはかなくて、思ふこ
とのみしげし。 (上巻・128～129頁)

結婚生活や夫との夫婦関係に大きな問題があるわけでもなく平穏な日常生活を送りつつも、心のうちに疼いている不安感の片鱗が垣間見られるこの記事からは、『蜻蛉日記』において道綱母が絶えず訴えている「思ふやうにもあらぬ身」という苦悩の内実が読み取られる。夫の「わが家とおぼしきところ」が自分の家ではなさそうに思われ、「世」、すなわち結婚生活というのは予想通りには行かないと嘆き、多くの子供にも恵まれておらず苦しい現状から逃れるすべがないことを思い悩む道綱母の様子から、一夫多妻制の下で正妻になる見込みもないまま結婚生活を送るしかない、不安定な妻の地位に不安感を抱いている道綱母の心境が見受けられよう。

この場面における「さいはひある人のためには、年月見し人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはかなくて、思ふことのみしげし」という件については、「当事者的表現」^④と言われるほど話者中心の主観的な文体を特性としており、主語と述語も多く省略されているために解釈の幅が広いと指摘されている『蜻蛉日記』の文章の中でも難文と見なされてきただけに、従来さまざまな解釈がなされてきた（【表】参照）。例えば、テキストにしている小学館新編日

表. 諸注釈別「さいはひある人」及び「年月見し人」の解釈^⑤

注釈書	さいはひある人	年月見し人
叢書	道綱母	仲正の娘
講義	道綱母	道綱母
大系	道綱母	道綱母
新釈	道綱母	道綱母
全注釈	一般の人	兼家
全集	兼家	道綱母
桜楓	時姫	道綱母
集成	兼家	道綱母
大成	兼家	道綱母
新大系	一般の人か	一般の人か
新全集	兼家	道綱母

本古典文学全集の頭注では、「さいはひある人」に関しては「幸運に恵まれて社会的にめざましく躍進していく人、すなわち兼家」、「年月見し人」に関しては「長い年月夫婦として暮してきた人、すなわち作者」とし、「さいはひある人」＝「兼家」、「年月見し人」＝「道綱母」と解している。そして、現代語訳では、「幸運に恵まれたあの人のために、長い年月連れ添ってきたわたしの為に、大勢の子供に恵まれているわけではないので、このように頼りないありさまでは、思い悩むことばかりあれこれと多い」と訳している。

しかし、拙訳注では、「さいはひある人」とは「一般の人」を指す一般的な言い方、「年月見し人」とは「道綱母」を指す表現と解釈する翻訳者の読み^⑥を反映し、この件は「幸いに恵まれた人である（になる）ためには、〔あまたの子に恵まれるべきなのに〕、〔あの人と〕長年の結婚生活をしてきた私でも（なのに）、多くの子供に恵まれていないので、このように心細いあり様で、絶えず物思いに耽るばかりである」というふうに訳した。そうした時、この件は、幸せになることを願いつづける一夫多妻制の中の寄る辺ない女の深いため息

と嘆きが込められている箇所、「思ふやうにもあらぬ身」という『蜻蛉日記』の主題性が集約されている箇所として読まれることができると思われる。

五. おわりに——「文明のテキスト」としての『蜻蛉日記』の韓国語訳——

以上で、翻訳という過程を経て同じく漢字文化圏でありながらも女性の自意識が凝縮された日本の古典文学として読み直されるようになった『蜻蛉日記』の韓国語訳の意義とその概要について考えてみた。このような『蜻蛉日記』の韓国語訳は韓国という異文化圏においては、日本の古代文化が集約された「文明のテキスト」として再誕生さし、新しく位置づけられるようになると思われる。

『蜻蛉日記』は次のようなことから、「文明のテキスト」として規定できると思われる。

まず、『蜻蛉日記』は、唐の衰退に伴い894年遣唐使を廃止し、905年勅撰和歌集の『古今和歌集』を仮名文字で編纂することによって、日本なりの国風文化を形成していく日本文明の過渡期的な様相を考察することができるという点から、「文明のテキスト」として読むことができよう。

次に、『蜻蛉日記』は、東アジア漢字文明圏の主流である中国文明と日本という非主流文明の影響関係及び相違点を政治制度や婚姻制度の側面から考察することによって、制度文明的な観点から東アジア古代文明の力学関係などが眺望できる。この点から、『蜻蛉日記』は「文明のテキスト」として読むことができよう。

三点目に、古代日本人の衣食住など日常生活から物質文明の様相を察することができるのであり、文化生活及び男女関係には日本人の美意識などが具体的に語られている。このように、生活文明的な観点に基づき古代日本文明の具体的な様相が眺望できるという点から、『蜻蛉日記』は「文明のテキスト」として読むことができよう。

最後に、『蜻蛉日記』は、漢字という東アジア共同文語文字の枠を超え、民

族語文字をもって自国独自の文明を開花していく周辺部文明の様相を明らかにすることができるという点から、「文明のテキスト」として読むことができる。具体的な時代状況を背景にし、一社会の制度と文化の中で生きた、古代日本文明の中で実存した一人の女性が自分の生の軌跡を民族語文字を用いて日常生活を文学的に形象化することによって、千年前の日本文明の様相と人々の生き様が再現されているのである。要するに、『蜻蛉日記』の韓国語訳は、文字文明的な観点から女性の書く行為を通して得られる人間解放や民族語文字の形成による日本独自の文明形成の様相などについて考察することができる、「文明のテキスト」として位置づけられると思われる。

[注]

- ①『蜻蛉日記』の引用は、木村正中・伊牟田経久校注・訳『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集 13、小学館、1995 年 10 月）による。
- ②このことについては、「「われはなになり」——『蜻蛉日記』に現れた話者の自意識とジェンダー——」（『日語日文学研究』第 67 輯 2 巻、韓国日語日文学会、2008 年 11 月）において、考察したことがある。
- ③『蜻蛉日記』に用いられた「今」を表わす時間表現は、「いま」102 例、「今日」67 例、「今年」6 例、「このごろ」27 例などがある。そのうち、文学的な時間の表れである和歌における用例、発話時点の時間の表れである会話文の用例、「いまはとて、いまより、いままで、いまや、昨日今日、今日や今日や」といった慣用的な意味として用いられている用例、「さらに、今にも、ちょうど、もう」などの派生的な意味として用いられている「いま」の用例などを除き、明らかに現在時点を表わす時間表現として地の文に用いられた用例をまとめてみると、「いま」の用例は 23 例、「今日」の用例は 30 例、「今年」の用例は 4 例、「このごろ」の用例 22 例である。また、明らかな回想記である上巻に用いられた「今」を表わす時間表現が母の死や町の小路の女をめぐる記事に集中していることから、原資料としての「備忘録」のようなものの存在も推定できよう。
- また、このことについては、「『蜻蛉日記』と「今」を表わす時間表現」（『解釈』第 57 巻第 3・4 号、通巻 659 集、解釈学会、2011 年 4 月）において考察した。
- ④渡辺実『平安朝文章史』（東京大学出版会、1981 年 7 月）97 頁
- ⑤参考にした注釈書は、次のとおりである。

叢書	物集高量『竹取物語 伊勢物語 大和物語 落窪物語 土佐日記 蜻蛉日記』（日本文学叢書 廣文庫刊行会、1918 年 10 月）
講義	喜多義勇『蜻蛉日記講義』（至文堂、1944 年 1 月）
大系	川口久雄校注『土佐日記・かげろふ日記・和泉式部日記・更級日記』（日本古典文学大系 20、岩波書店、1957 年 12 月）
新釈	次田潤・大西義明『かげろふの日記新釈』（明治書院、1960 年 7 月）
全注釈	柿本奨注釈『蜻蛉日記全注釈 上巻・下巻』（日本古典評釈・全注釈叢書、角川書店、1966 年 8 月・11 月）
全集	木村正中・伊牟田経久校注・訳『土佐日記 蜻蛉日記』（日本古典文学全集 9、1973 年 3 月）

- 桜楓 橘豊・田口守『蜻蛉日記』（桜楓社、1978年4月）
集成 犬養廉校注『蜻蛉日記』（新潮日本古典集成 54、新潮社、1982年10月）
大成 上村悦子『蜻蛉日記解釈大成 第2巻』（明治書院、1986年1月）
新大系 今西祐一郎校注『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』（新日本古典文学大系 24、岩波書店、1989年11月）
新全集 木村正中・伊牟田経久校注・訳『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集 13、小学館、1995年10月）

⑥このことについては、「『さいはひある人』と『年月見し人』——『蜻蛉日記』の本文解釈——」（『解釈』第56巻 第3・4号、通巻653集、解釈学会、2010年4月）において考察したことがある。

＊討議要旨

村尾誠一氏は、現代語訳（翻訳）する難しさはどのような点にあるか、また、韓国に韻を踏む詩があるかと質問したのに対し、発表者は、前者について、これまでの韓国語訳『源氏物語』では、作中の和歌の形式的な部分について、正確に翻訳はされていないという問題点を指摘し、そのため、発表者が和歌を訳す際には、三十一文字という形式にこだわり、ある程度の雰囲気が伝わるようにしたと答えた。後者については、韓国にはないと回答した。